

# 行田市埼玉の年中行事

— 1975年前後のこと八日から晦日払いまで —

大 友 務

小稿は、「行田市埼玉の年中行事 — 1975年前後の正月から初午まで —」（本誌 第6号所収）に続く後半部分である。

埼玉地区の概要等は既出稿で記述した。

前回の原稿作成時にはお元気だった横山正三氏は、1994年9月19日に御逝去された。この20年来、公私ともにと言う以上に、身内のようなお世話をいただいていた。今は衷心から御冥福をお祈りするばかりである。

## ◆話 者

行田市埼玉5138 萩原 太郎氏（大正6年9月7日生まれ）

同 萩原 シン氏（大正11年7月11日生まれ）

行田市埼玉341 故・野口 四郎氏（明治39年8月12日生まれ）

同 故・野口 トシ氏（明治43年3月生まれ）

行田市渡柳516 故・加相 誠一氏（明治32年4月11日生まれ）

行田市渡柳556 伊藤万五郎氏（明治36年2月18日生まれ）

行田市埼玉344 故・横山 正三氏（大正7年4月17日生まれ）

同 横山 マサ氏（大正15年2月17日生まれ）

（A～E家と上記の順は、必ずしも対応していない。）

## 資 料

### ◇メカイ節供

現在（1975年前後）では、見かけることもなくなってしまったが、2月8日と12月8日にはメカイ節供という行事があった。家の庭や軒先に長い竿を立ててその先端に大きなメカイを伏せて乗せた。メカイとは、目の荒い籠のことである。この日は、オニが訪れる日であるが、目籠を見てこんなに大きな目の怪物がいると思って退散するのだと伝えられている。オニというのは、悪い病気を持ってくるものだと考えられている。2月と12月に行なったが、どちらも同じ行事内容で、どちらかのときにオニが来る、去っていくなどの区別はとくに聞いたことがない。

メカイを掲げるということは奇妙な行事だと思ってきたが、考えてみると目の病気のモノモライのこともこのあたりではメカイという。それと関係があるのかどうか、ふだんでもメカイ（目籠）を頭から破ると目が悪くなると子供のころは叱られたものである。とくに決まった料理などは作ることはなかった。（B家）

#### ◇木綿坊主

木綿坊主という行事の名前を聞いたことがあるがはっきりとは分からない。(E家)

[参考] 久喜市内の聞き書き調査によると旧暦2月15日を木綿坊様とか木綿坊主といった。綿の豊作を祈る行事であったというが、行事の内容は不詳である。

#### ◇彼岸の棚参り

春の彼岸は春分の日を中心に行なわれ、中日(新暦では3月21日前後)にはぼた餅を作り自分の家の仏壇に供えるほか、親戚や近所の仏壇にもお参りに行く。これを棚参りという。他所に棚参りに行くときには、酒、砂糖などを土産に持って行く。寺の墓にもお参りに行く。ぼた餅ではなく草餅を作る家もある。(A家)(B家)

#### ◇雛節供

ヒナセック(雛節供)は、現在でも4月3日に行なっている。雛人形は、嫁の実家から贈られるのが普通で3日の前には飾りつけ、草餅を作る。(A家)

雛節供は、4月3日に行なう。この日は、草餅を食べ、うどんも食べる。(B家)

雛節供は、小さい女の子がいる家で行なうが、最近では3月3日に行なう家も多い。農家でも若い夫婦は勤めに出ている家が多いのでカレンダーどおりに行なうようになった。(E家)

#### ◇お日待ち

4月15日と10月15日は、浅間様(延喜式内社・前玉神社)のお日待ち(例大祭)である。この日は、アンビンモチを搗く。現在では行なわない家も多くなってきたが、年寄りのいる家でも搗いている家が多い。アンビンモチは、糯米を臼で普通に搗いた丸餅であるが、中には塩味の餡を入れる。大きさは、家によって多少の違いはあるが、だいたい10cm前後である。春と秋のお日待ちでは大きさを違えるものだという事を知ったこともあるが、どちらの方を大きくするものかということはないし、実際にはあまり気にしないで作っている。搗いた餅は、家で食べるほか埼玉地区以外の親戚などに届けた。届けるのは子供の役目で、届けられる方も塩餡の餅は珍しいので喜んでくれ、こずかいをくれたものだ。だから子供もそれを楽しみにお使い役を引き受けた。

現在ではアンビンモチを搗くのは、4月と10月のお日待ちだけとなったが、かつては葬式にもアンビンモチを搗いた。親が死ぬと子供はもちろん近い親戚はアンビンモチを搗いて葬式の施主のところに届けた。1升の米から9個の餅を取る場合と10個を取る場合がある。大きめとそれより少し小さいものを作るのである。作った餅は、ハンダイ(盤台)に入れ、2個のハンダイを馬につけて施主のところに届けた。施主は、届けられたアンビンモチを焼香に来てくれた人達に悔やみ返しとして渡した。昭和の初めころまでは行なっていたが、第2次世界大戦に入って餅どころではなくなり、行なわれなくなった。昭和20年代以降は、アンビンモチを搗くのはお日待ちのときだけになっている。

春のお日待ちは、養蚕の春蚕の始まる前であり、これがすむと10月末から11月初旬ころまでは養蚕、水田の仕事が続きいよいよ忙しくなるという気持ちになったものだ。(B家)

お日待ちのアンビンモチは、たいがいは前日の14日の晩に搗いた。この10年ほどは搗いていな

い。年寄りも亡くなり子供も大きくなってだんだん昔からのことはやらなくなってきた。お日待ちのアンピンモチは秋はでかくて春は小さいと言ったものだが、その逆であったかも知れない。

(A家)

#### ◇端午の節供

端午の節供は、かつては月後れの6月に行なっていたと聞かすが、現在では5月5日に行なっている。長男が生まれて初めての節供には嫁の実家から鯉幟などが届けられる。現在ほどこの家でも魚の鯉の形をしたものと吹き流しになっているが、かつては竿に武者絵などが描かれた幟旗であった。この日は、柏餅を作り親戚や近所に配る。6月の節供のころならば実際の柏の葉を使った柏餅が作れるが、5月ではまだ葉が出そろっていないので作るのは無理である。それに手間もかかるので、現在では餅屋に頼む家も多い。

また、現在ではあまり見られなくなってしまったが、この日は母屋の軒先に菖蒲や蓬を刺すことが行なわれた。魔除けになると信じられていた。風呂にも菖蒲を入れることが行なわれた。

雛節供は今でも4月の月後れで行なう家が結構あるのに、端午の節供は6月から5月に変わった時期ははっきりとした記憶にはないが、相当に早くから5月になっていたと思う。なにせ自分の子供の節供をやっていたころから20年以上もたっているのに、忘れてしまう。6月というのは水田も機械化前は5月中旬から苗代作り・種まき・苗取り・田植えと続き、昭和20年代まで行なっていた養蚕が盛んなころは6月上旬といえば春蚕のマユカキ（上簇）で忙しい時期であった。だから6月5日はとても子供の行事を行なっている暇はなかったから早い時期に5月5日行なうようになったのだと思う。(A家)

#### ◇6月1日

6月1日の行事については知らない。月後れの7月1日は、団子と小麦饅頭を作ってオカマサマ（母屋の土間の竈の後ろに祀っている）に供える。(D家)

6月1日には、とくに行事はない。(B家)

#### ◇サナブリ

水田も機械化前は田植えが大仕事であった。5月中旬の苗代作り・種まきのあと6月下旬から7月上旬にかけては苗取り・田植え作業が行なわれた。農家では同じ期間に一斉に行なうので猫の手も借りたい忙しさだった。スケット・テマツカワリとってお互いに手伝い合って行なった。このあたりには、ウマイイ・ウマユイ（馬結）とって何軒かで1頭の農耕馬を回り番で飼うやりかたがあり（参考、大友「行田市埼玉における馬とムギコナシ」『埼玉民俗第5号』所収。1975年）ウマイイの仲間でテマツカワリをしあうこともあった。馬を飼っている家から田搔きのときなどに馬を借り、そのお礼として田植えを手伝いに行く家もあった。

田植えは、株が曲がらないように縄を張ってそれに沿ってまず1株ずつを植え、その株を目安に縄と直角に5株ずつを植えた。なれた人は、縄だけを頼りに最初から6株ずつを植えていった。田植が終わると、苗代の水口に苗を7株刺してから抜いて持ち帰り土間のオカマサマに供えた。これをサナブリといった。苗と一緒にお神酒と小麦饅頭15個を供えた。饅頭は、馬にもやった。農具のマンガ（馬鋏）にも供えた。饅頭ではなく赤飯やぼた餅、餅を供える家もあった。サナブ



りのお供え物は、手伝いに来てくれた家にもお礼に届けた。(D家)

#### ◇野上がり正月

大正時代には、地域全部の田植えが終わると触れ（知らせ）が回りみんなで仕事を休んだという。これをノアガリ（野上がり）正月といった。当時は、日曜日だから仕事が休みというわけではなかったので、このように仕事の区切りで一斉に休みを取った。ノアガリ正月や節供などの休み日に働く人のことは「物草者の節供働き」と陰口を言われたものだ。もっとも、最近は日曜日に休むどころか若い人は勤め人が多くなったので農家仕事は日曜日や勤めから帰ってきてからする家も多くなった。仕事も機械化が進んでそれでもすむようになった。(B家)

#### ◇初山

埼玉地区の鎮守・前玉神社のことは、浅間様と知っているが、赤ん坊が生まれたときは浅間様の神主さんに頼んで名前をつけてもらった。3種類くらいの名前を書いてもらい、家で籤を引いてどの名前にするか決めた。誕生の祝いは、餅を搗き嫁の実家の親も呼んで行なった。

前玉神社は、6月30日と翌日の7月1日が浅間様の山開きで、生まれてから初めてこの日を迎える赤ん坊はお参りに行く。これを初山という。赤ん坊が生まれると初山以外にも男の子は生まれてから31日目、女の子の場合は21日目にお宮参りといって浅間様にお参りをする。

初山のときは、神主さんから赤ん坊の額に印を押してもらう。こうすると赤ん坊が元気に成長するといわれている。神社では、初山の団扇やふきん、お札を受けて（買って）きて生まれたときのお祝いを貰った親戚や隣組などに茶菓子などをつけて配る。これを初山土産といっている。配るのは1軒には団扇1本だが、少ない家でも5、6本だいたい5、60本は神社から受けていく。

赤ん坊が生まれて、初山を行なわない家はまずないだろうが、最近は若い夫婦は勤めている人がほとんどなので、だんだん山開きの日取りに限らなくなってきている。日曜日に行く人も多いという。(B家)

6月30日と翌日の7月1日は山開きで、7月14、15日は、浅間様の祭りである。祭りには昔は神輿が出たと聞くが自分が見た記憶はない。(A家)

山開きのころはちょうど田植えの時期で、「今日は初山だから赤ん坊を連れて行かなくては」と田植えを抜け出してお参りに行ったものだ。(E家)

#### ◇お獅子様

埼玉地区に限らず行田地方には、春から夏にかけてオシシヤマ（お獅子様）といわれる行事がある。北埼玉郡騎西町の延喜式内社・玉敷神社から獅子頭と猿田彦の面と木製の剣を借り受けてきて笛・太鼓の囃子の音に合わせながら各家を回る。玉敷神社に借りに行くときは走っていくのが本当のやり方だといわれているが、2、3里はあるからとても走っては大変なので、ずっと以前から自転車で行くようになり、現在は車で行く。神社の方では朝の5時ころには貸し出す用意をして待っているのだから、車になっても朝一番の仕事で行くことになる。神社側では、何日はどことどこという貸し出しの書き物があってその分のお獅子様は用意しているのだが、万が一にも遅く行ったら借りる分がなかったということにでもなれば耕地（小字）の人達に申し開きができないので、朝早くでかけていく。もっとも、若いころに年寄りに聞いた話では、本当に真夜中のう

ちに走って借りに行き、戻ってくる時にはさすがに疲れ、借り受けたものもあるのでそうそう走ることもできずに、さもさもずっと走ってきたように耕地が近づいてから走り出したものであるという笑い話のような苦労話もあった。

お獅子様のやり方は、以前は各家の座敷にも土足のまま上がり家の中を駆け抜けるのが習わしだった。このようにして魔除けになると信じられてきた。家によっては酒でもてなす場合もあり、つい酔って元気が出過ぎてしまい座敷の中を暴れてしまうこともあった。もともと、気の合わない家では酔ったふりをして暴れるということもあったようだが、ともかく、このような荒獅子ではしょうがないということになってやり方を改めた。それまでは若い衆が猿田彦の面を破って回ったが、以後は面を頭の上に掲げて家の入口で拝むようにした。

お獅子様は、埼玉地区の小字でもどこでも行なっている行事ではなく渡柳・富士山・野・百塚の小字で行なっている。玉敷神社が貸し出す都合もあるから行事のある日は同じ日ではない。渡柳は7月18日に行なっている。最近では、各家を回るのも大変だということで、耕地の鎮守で拝んだあとはトラックにお獅子様を乗せて耕地内を回っている。(D家)

#### ◇百万遍

お獅子様と同じころの行事に百万遍がある。埼玉地区の上埼玉と下埼玉の行事である。埼玉地区の小字では、お獅子様が百万遍かどちらかの行事を行なっている。行事の内容は違うのに時期も同じだし、魔除けのためということも同じで、しかも同じ地区では両方はやらないというのだから、お獅子様と百万遍は何か関係があるのではないかと以前から思っている。

上埼玉では7月16日が百万遍の日で(平成6年現在は、それに近い土曜日から日曜日)で、百万遍は大きな数珠を子供たちがみんなで持って「ナンマイダー」といいながら各家を回る。現在は、数珠は大人が盆に乗せて持ち、小学生は縄みたいなものを持って回る。各家では回っている大人がその家の家族にお神酒を出し、来てもらった家ではお賽銭を出す。百万遍は、回ってきた人に水をかけると縁起が良いといって各家ではバケツに水を用意しておいて水をかけてやる。回る方はずぶぬれになって回る。(E家)

#### ◇盆の蓋あけ

8月1日は、地獄の蓋があく日だというのが、とくに行事などは行なわない。(E家)

#### ◇七夕

8月7日は、七夕で前日の6日に七夕の飾りを作る。短冊や色紙に願い事などを書き、裏山(母屋の北側にある竹林)から取って来たシンコ(その年に出てきたばかりの竹)に下げる。竹は母屋の前の庭に立て、7、8mほど離れたところに杭棒を立ててその間に真菰で縛った縄を渡す。縄には真菰で作った1m余りの馬を向かい合うように吊るし、馬と馬の間にはホウズキとうどんを下げる。馬は雌雄の2頭だという。うどんは馬の手綱だという。7日の朝にはうどんを食べる。(E家)

七夕の馬の真菰は、近くの小針沼から刈ってきた。ウチでは七夕はうどんではなく、赤飯を食べる馬にも皿に盛った赤飯を供えた。(C家)

真菰を刈る日などはとくに決まっていない。刈ってからしばらくは干しておかなければならな

いので、天候の具合などを見て近くの用水から刈ってきた。8月の初旬は各家から1人ずつ出て用水の真菰刈りをするが多かった。用水の水の流れをよくするための作業だが、そのときに刈った真菰を使うこともあった。昔は、七夕の朝には水を浴びた。(B家)

七夕飾りは、8日の朝には取り外す。馬は洪水のときには家をまもってくれるといわれており、家のトボ口(大戸のある入口)の上や倉の柱などに吊るしておいた。屋根の上に放り上げる家もあった。その馬は1年間は、そのままにしておき、新しい馬を吊るすときに前年のものは取り外して七夕飾りに使ったシンコといっしょに用水や川に流した。最近では、幼稚園などでも七夕の短冊作りなどをするので竹飾りを立てる家はあるが、馬まで作る家はほとんどなくなってしまった。それに、昔と違って馬などを川に流すと環境を悪くするという声もあるので、やりずらくなってきた。(A家)

#### ◇盆の期日

大正時代までは、9月1日が迎え盆の日だった。関東大震災のあとで現在と同じ8月13日に迎え盆をするようになった。(B家)

#### ◇盆

盆には、盆棚を作る。盆棚は、縁側(母屋南側の廊下)に作る。シンコを廊下と座敷の柱に結わえて立て、障子2枚を左右に立ててコゼナワ(細縄)を巻いて固定させる。竹を2つに割ったものなどで棚を作りその上にボンゴザ(盆蓆)を被せる。普段は仏壇においてある位牌や香炉、花立てなどを盆棚に置き、仏さんの掛け軸も下げる。棚の下にはショウリヨウサマ(精霊様)を祀る。ショウリヨウサマとは、行き倒れになった人などや生まれたばかりに亡くなった子など棚の上で御先祖様として祀られない無縁仏のことであるという。水を上げ、灯明、線香もつけて棚の上に比べれば簡単な形だけれど、一応は棚と同じものを供える。

8月13日は迎え盆であるが、この日になる前に寺に行く用事がある。重箱に1升くらいの米を入れ、茄子、胡瓜などの野菜と一緒に持って行く。これをボンブチという。寺ではヒキチャ(粉茶)を受けてくる。

13日の迎え盆は、夕方には花、花立て、オサゴ(洗米)、線香、水を持って寺に御先祖様を迎えに行く。寺からは提灯に明かりをつけて戻ってくる。家では、入口に手桶に水を張って迎える。先祖様の足を洗うためだという。「お疲れ様でした。足を洗ってお入りください。」と手桶の水を撒くのである。我が家では、入口ではなく盆棚の棚とショウリヨウサマに井に水を入れておいておき、これで足を洗ってもらうのだといわれている。井には、足を洗うためだといってミソハギ(溝萩)を入れておく。

盆棚の供えものは、13日の御先祖様を迎えてきた夜はボンブチを持って行って受けてきたヒキチャのお茶、14、15日は朝はぼた餅、昼うどん、夜は御飯ととうなす汁と決まっている。

盆の期間中は、タナマイリ(棚参り)といって親戚や隣組の人がお参りに来る。とくに新しい仏さんができて初めての盆には提灯を贈られるので、そのすべてを盆棚の周りに吊るし、タナマイリに来る人も多い。来た人には、盆の決まり料理のぼた餅やうどんを御馳走する。盆の期間中に寺からお坊さんが来て読経を上げていく。



御先祖様をお送りする送り盆の前日の15日には2個の茄子に足をつけて2頭の馬を作り、盆棚に供えておく。馬の食べ物として茄子をサイの目に切ったものも供える。ショウリョウサマの方にはウチでは供えるが、簡略に棚の方だけ供える家もある。

16日は、いよいよ送り盆の日で、朝にはぼた餅の他に団子を供える。団子は地獄の閻魔様への土産だということで、土産団子という。昼はうどん、夕飯は小豆飯と決まっている。小豆飯の他にジオウサマに供えるといってヨゴシという茄子の胡麻味噌和えを作って供える。

暗くなってから、提灯をつけて御先祖様を送り出す。行き先は、寺に行く家と自分の家の畑の昔から決まった場所、ケイド（母屋から表通りにつながる通路）の表まで送る家などがある。送り盆の棚を作るところは2尺四方ほどの草を刈って奇麗にし、真菰の小さな蓆（縦横4、50cm）の上に皿に盛った土産団子、2頭の茄子の馬、ホオズキ、野菜類を供え、竹を切って作った花立てに金銀の造花を刺す。焼香を灯し、笹などを燃してその煙に乗って御先祖様に帰ってもらう。（B家）

#### ◇八 朔

9月1日は、ハッサク（八朔）といって嫁の里帰りの日である。現在は、嫁も自分で車を運転できるし何か用があるとすぐに帰れる時代になったが、昔は近くの村から嫁いできたといっても歩きだから帰るのも大変だった。それに姑の目も気になるし。その点、八朔には大威張りで帰れたのだから楽しみであった。

実家に帰れるときは、生姜を土産に持って帰る。実家では、饅頭、そば、うどん、赤飯などの変わり物を作ってくれた。だいたい1泊してから戻ったが、そのときには実家で作ってくれた変わり物と箕を土産に戻った。生姜を持って帰り、箕を土産に戻るのは「しょうが（生姜）ない嫁だが見（箕）直してください。」という意味だといわれている。（A家）

#### ◇十五夜

旧暦の8月15日は十五夜で月にお供えものを上げる。新暦では9月中旬になる。箕の上に月見団子の他、里芋、栗、柿などの農作物を供え、花瓶か空き瓶にススキ、十五夜花（シオン）を挿してかざる。団子は粳米の粉で作ったもので15個供える。まだ稲の収穫時期になっていないから前年の秋に穫れた米を使う。団子ではなく、以前はその年に穫れた小麦で蒸し饅頭を供える家も多かった。栗、柿などは5個供えるものだという人もいる。

供え物は、盗まれると縁起が良いと考えられており、子供たちが竹竿の先で刺して取っていったものである。最近は、普段から御馳走を食べているので、わざわざ盗みに来る子供もいなくなってしまった。それに、箕を使わずにお膳に乗せるなど、供え方も少しづつ簡略化してきているし、供えない家も増えている。（B家）

十五夜のもを食べると、一生、国巡りをする（あちこち点々と暮らす。）というので、子供のころも食べさせて貰えなかった。（C家）

十五夜の供え物を、女の子が食べるとお月様のようにいつも動いている（良縁に恵まれない。）というので、娘には食べさせなかった。（D家）

#### ◇秋の彼岸

秋分の日を中心とする1週間。中日は、9月23、4日ころ。行事内容は、「彼岸の棚参り」の項参照。

#### ◇クンチ

旧暦の9月9日はクンチといって家の神仏に供え物をする日だというが、現在は何も行っていない。(C家)

#### ◇十三夜

旧暦9月13日は十三夜で、8月の十五夜には蒸した団子を供えるが、十三夜には生の団子を供えるものだという。実際には十三夜の行事は行っていない。(B家)

#### ◇十日夜

旧暦10月10日は、トオカンヤ(十日夜)といって子供たちの行事があった。収穫したばかりの干した稲藁で両手で握ったくらいの太さの藁束を作り、ほどけないように藁でぐるぐる巻にする。藁束の芯には芋がら(里芋の茎を干したもの)を入れる。藁束の一方を握りやすいように輪にする。これを藁鉄砲という。竹を二つに割った物を振って音を出す竹鉄砲というものもあった。10日の日には、それぞれ藁鉄砲を持った子供たちが寄り合って「トオカンヤ トオカンヤ 忍の鉄砲に負けるな。」と掛け声をかけながら地面に打ち付けた。家の庭で輪を作ってやったものだ。各家では、小遣いをやった。忍の鉄砲というのは、行田の忍城に大砲があり、明治時代になっても正午の時間を知らせるのに空砲をならした。その音に負けないほど大きな音で藁鉄砲を打ちつけようという意味である。

トオカンヤは、ちょうど麦蒔きを終えた時期の行事で、麦畑を耕すのに蛙を切ってしまったたりして犠牲になるので、蛙の供養の行事だといわれている。

この行事も第2次世界大戦が始まったころには行なわれなくなってしまった。(B家)

#### ◇神送り・神迎え

神様が出雲に行くとかいうことは知らない。そういうこととは別に、秋から暮れにかけて「出雲から来ました。」といって「出雲大社」と書いたお札を持ってくる。袴をはいた50歳くらいの女性である。「御苦労様」といってお札を受け、すぐに大神宮様に上げて手を合わせる。子供のころから(大正15年生まれ)来ている。(昭和60年代に入ってから来なくなった。歳を取って来られなくなったのかと思う。)(E家)

#### ◇恵比寿様

11月20日は秋の恵比寿講である。この日は、収穫、脱穀を終えたばかりの新米を炊いて恵比寿・大黒様に供える。山盛りに盛って供える。新米は、屋敷鎮守(屋敷神)の稲荷様にも供える。恵比寿・大黒様には、新米の他に秋刀魚2尾づつとお神酒、ケンチョン汁を供える。ケンチョン汁には、里芋、人参、ごぼうを入れる。(D家)

11月20日になると「今日の恵比寿講だから新米を炊こう。」といって新米を炊いて恵比寿様に供え、家族も食べる。恵比寿様には新米とケンチン汁、秋刀魚を供える。恵比寿講は、11月20日だけである。1月20日はハツカシヨウガツで雑煮を食べるが、恵比寿様の行事は行なわない。また、恵比寿様が出かけるとか帰ってくるとかいうことも知らない。(E家)

#### ◇川浸り

12月1日には、とくに行事はない。(B家、E家)



#### ◇メカイ節供

旧暦12月8日はメカイ節供の日である。これは旧暦2月8日と対になっている行事だが、実際には早くに行なわれなくなってしまった。(行事内容は、2月の「メカイ節供」の項参照)

#### ◇大師講

旧暦11月24日は大師講の日で、小豆粥を作った。現在は行なわれていない。(D家)

#### ◇星祭り

地域全体の祭りではないが、冬至の日には前玉神社で星祭りが行なわれている。午前11時ころから湯立て神事を行ない、空に向かって矢をいる。神事に使った弓や矢は魔除けになるとして集まった人達が持ち帰り、家の入り口などに掲げておく。昔からの行事ではない。(B家)

#### ◇大掃除

年末の大掃除は行なうが、日にちは決まっていない。(E家)

#### ◇歳暮

年の暮れになると、分家から本家に歳暮シャケ(鮭)を持って来る。かつては、新巻き鮭と決まっていた。貰ったシャケは、土間の梁に下げて保存した。持ってきてもらおうと本家では酒と食事を出し、品は決まっていないが有り合わせの土産を渡した。(B家)

#### ◇餅搗き

正月の餅搗きには、年末28日に行なうことが多い。28日と決まっているわけではないが、翌日の29日は苦(9)餅、大晦日は一夜餅といってこれらの日は避ける。(E家)

#### ◇晦日払い

大晦日にはミソカッパライ(晦日払い)といって、浅間様から受けてきた御幣と新縄で屋敷鎮守の稲荷様に注連縄を張り、家の主人が御幣で「払いたまえ、清めたまえ」と唱えながらお払いをする。御幣は、稲荷様の側の地面に立てておく。(A家)

### 埼玉地区年中行事の特徴

#### 〔行事間の継承性〕

本誌第6号と小稿で行田市埼玉の年中行事を記述したが、多くの行事が行なわれなくなっていく中で一つの行事から次の行事へと結び付けようとする「行事間の継承性」とでも言うべき意志を感じ取ることができる。その特徴は、正月を中心とする春の行事に顕著である。第6号に掲載した部分であるので内容を少し詳しく紹介すると

- 1 正月4日は棚さがしの日で、歳神棚に上げてあるうどん・雑煮を下げる日である。下げたものは、7日の七草オジヤに入れて食べる。
- 2 正月20日はハツカショウガツで、卯の日に歳神様から下ろしたお供え餅を入れて雑煮にした。
- 3 ハツカショウガツの雑煮には、もの作りの日(正月14日)に搗いた餅を入れた。
- 4 年越し(節分)の豆は少し残しておき、初午のスミツカリに入れることになっている。
- 5 雷のときに年越しの豆を庭に蒔けば(あるいは食べれば)雷が落ちないと言う。

以上の事例をみることができる。これらは、歳神への神供→七草、歳神への神供→二十日正月、小正月→二十日正月、節分→初午、節分→雷と儀礼食を媒介として行事の間に継承性を持たせようとする志向を認めることができる。

#### 〔神去来観念の衰退〕

周辺地域の事例から埼玉地区にもかつては伝承されていたであろう行事がすでに記憶から消え去っている、あるいは行なわれなくなって久しく遠い記憶となっている行事も多い。

メカイ節供は、12月8日と2月8日の2回、正月を挟んで行なわれてきた行事である。「鬼が訪れる日」であるが、すでに1975年当時でも「見かけることがなくなってしまった」行事である。

恵比寿講は、11月20日と1月20日に行なわれてきたが、正月20日の恵比寿講はハツカショウガツと同日であるため恵比寿講としての影は薄い。その一方で11月20日（旧暦10月20日の月遅れ）の恵比寿講は、「収穫、脱穀を終えたばかりの新米を炊く」日としての意識が強く、収穫祭の色合いが濃い。埼玉県内でも神無月20日はイリエビスといって、（児玉郡神泉村下阿久原など。以下、県内の事例については主に埼玉県編刊『新編埼玉県史 別編2 民俗2』1986年の「第10章 年中行事」・八朔～年末は筆者稿・を参照とする。）恵比寿様が出稼ぎから帰って来る日と伝えるところは多いが、埼玉地区では恵比寿の去来伝承は耳にすることができなかった。

神無月に神々が出雲にに行くという信仰は全国に広く分布しているが、埼玉県は竈神のオカマサマとかコウジンサマだけが出雲に行き、中帰り・中通いと称して15日に1度戻って来る（15日にはオカマサマに団子を供える。）という埼玉独特の形態を伝承している地域である。しかし、埼玉地区では神無月の神送り・神迎えの伝承は確認できなかった。この伝承には収穫祭的な意味合いが認められるが、埼玉地区ではその性格は恵比寿講に顕著であることは記述のとおりである。

大師講も神去来と収穫祭的な意味合いを持つが、わずかに小豆粥を作った記憶を残すだけである。

#### 〔行事消滅の要因〕

筆者はかつて久喜市内の年中行事の資料に基づき、行事の衰退の傾向を抽出する試みを行なった。（久喜市史編さん室編『久喜市史 民俗編』1991年。第1章「久喜の民俗の概要」、第4章第2節「年中行事」）。それによれば、正月の諸行事には衰退傾向が強いものに対して盆は調査時点でも盆棚など簡略化されたものもありながら盆行事全体としては盛んに行なわれている。そして他の行事としては

- A(1) 従来よりも現在の方が盛んな儀礼 = 子供が主役の家単位で行なう儀礼 → お年玉・雛祭り・五月節供・七五三  
A(2) 現在も行なっている儀礼 = 同 上 → 節分・豆まき・おしゃか様祭り  
B 同 上 = 寺社との関わりが深い儀礼 → 春彼岸・初山参り・天王様の祭り  
C 消滅またはその傾向にある儀礼 = 子供集団による共同の儀礼 → 天神講・十日夜  
D 同 上 = 農耕との関わりが深い儀礼 → 木綿坊主・二百十日・二百二十日  
E 同 上 = 儀礼の対象がなくなったもの → 恵比寿講・次郎の朔日・こと八日・  
儀礼の持つ意味が忘れられて 春ごと・八朔・三九日・神送り・  
しまったもの 神迎え・大師講・川浸り朔日・  
奉公人の出替わり

年間の行事構成が若干異なるが、この傾向は埼玉地区でも同様に認められる。埼玉地区の資料から付け加えるべき点を読み取るとすれば、行事の衰退・消滅のきっかけとして期日の変化、あるいは他の行事との併合が上げられる。例えば小正月のもの作りは「2月に正月を行なっていたころは作ったが、1月に行なうようになってからはしていない。」し、ハツカシヨウガツも同様である。十日夜や大師講も旧暦期日で行なっていたわけで、これをあえて新暦月後れの期日に変更してまで伝承する必然性を感じなかったのであろう。

また、旧暦6月1日は室町時代以降近世までは「氷の朔日」といって凍った餅を献上することなどが武家などの儀礼とされた日で、民間年中行事でも北陸地方から山陰地方にかけては、この行事名で正月の餅を凍らせておいて6月1日に食べる行事が行なわれてきた。埼玉県内ではケツアブリと称して、麦藁を庭先や門のところで燃して、その煙で尻をあぶると風邪を引かない、腫物ができると言われてきた。そしてこの日は小麦饅頭を食べる。埼玉地区資料の「6月1日の行事については知らない。月後れの7月1日は、団子と小麦饅頭を作ってオカマサマに供える。」がまさにこれである。しかし、旧暦6月1日、月後れの7月1日は埼玉地区の鎮守・前玉神社の山開き・初山である。小麦饅頭も山開きのお祝いのように思われ、ケツアブリの名称・行事は（行田市下中条では1975年当時も伝承していたが）埼玉地区では早くに忘れ去られたようである。

6月1日と期日的にも対置している12月1日の川浸りは、すでに忘れ去られている。久喜市内の事例を参考にすると大正時代の記録には「かびたり」の名称で「此の日、餅を作りて食す。之を度量定め餅といふ。」とあるが、調査時点では「餅を食べた」という記憶を呼び戻してくれた古老がわずかにただけで、行事名称などは忘れられていた。埼玉地区もほぼ同様であり、この期日は月後れにすると新暦の元旦にあたり、行事の本来の意味も早くに忘れ去られていたであろうから、遅かれ早かれ消滅する運命にあった行事である。

## おわりに

行田市埼玉の年中行事を概観してきた。まず、春の行事間の継承性に注目したが、本来は継承性をもっとも強いのは神去来の観念に基づく行事であった。（田中宣一「年中行事の構造」『日本民俗文化体系9』小学館刊、1984年。田中『年中行事の研究』桜楓社刊、1992年所収。参照）。埼玉地区においては、早くに衰退傾向を辿ったわけだが、春の行事間の継承性は伝承者にも強く意識されている。年中行事は、時代とともに、生活とともに変化と持続をしてきたわけだが、行事の多くは本来的には継承性を持ち、それが変化する中で継承性が希薄になり独立的な行事へと成長（あるいは衰退）していく傾向が認められるのではないかと思われる。恵比寿講も秋だけに行ない春は行わない家の行事には、継承性は見られずに独立的な行事の形態を示しているのがその一例である。

一方で、独立的に伝承されてきた行事間に新たな継承性が生ずる場合もあり得よう。必ずしも残存状況が良いとはいえない埼玉地区の年中行事の中でも春の行事、しかも他の地域では独立的に伝承されている場合が多い節分と初午の間に強い継承性が認められるのは、「良いことは長続きしてほしい。」という伝承者意識によるりある時点で生じた継承性のように思われる。



埼 玉 地 区 生 産 暦

	水 稲 (機械化前)	同 左 (機械化後)	大 麦	陸 稲	養 蚕	年 中 行 事 (旧行)	年 中 行 事 (1975年前後)
1 月			↓ 麦踏み				・正月、七草 (7日) ・小正月
2 月			↓ ニバンザク、麦踏み			・餅搗き (28日) ・正月・節分・七草 (7日) ・モノツクリ等 ・二十日正月・晦日正月	・節分
3 月	ニボウナイ	↓ 箱苗の採土 (田植機導入後)	↑ 追肥 ↓ 土入れ、麦踏み			・彼岸 ・雛祭り (3日) ・初午	・雛祭り (3日) ・初午
4 月			↑ 土入れ ↓ トメザク			・彼岸 ・雛祭り (3日) ・お日待ち (15日)	・彼岸 ・(雛祭り) ・お日待ち (15日)
5 月	↑ 苗代づくり、播種 ↓ ミボシ	↑ (苗代づくり、播種)		↑ 施肥、播種			・端午の節供
6 月		↑ 田植 (田植機導入後) ↓ 苗取り、田植え (耕耘機導入後)	↑ 麦刈り ↓ 脱穀、調整	↓ 除草	↑ 春蚕	・端午の節供	
7 月	↑ 苗取り ↓ 田植え ↑ イチバンゴ ↓ ニバンゴ、追肥 ↑ サンバンゴ	↑ 追肥		↑ 麦のカッパ抜き ↓ カッパ返し ↑ イチバンザク		・山開き、サナブリ ・初山 ・お獅子様 ・百万遍 (渡柳)	・山開き ・初山 ・お獅子様
8 月	↓ 土用干し ・出穂水			↓ 除草、中耕 (3回程度)	↑ 初秋蚕	・七夕 (7日) ↓ 盆 (13~16日)	・七夕 (7日) ↓ 盆 (13~16日)
9 月					↑ 晩秋蚕	・八朔 ・盆 (大正時代) ・十五夜	・(八朔) ・十五夜
10 月	↑ 糯米、早稲刈り取り ↓ 刈り取り	↑ 刈り取り ↓ 脱穀 ↑ 調整	↑ 施肥 ↓ 耕耘、砕土 ↑ 麦播き	↑ 刈り取り ↓ 脱穀、調整	↑ 晩々秋蚕	・十日夜 (10日) ・お日待ち (15日)	・お日待ち (15日)
11 月	↑ イチボウナイ					・恵比寿講 (20日)	・恵比寿講 (20日)
12 月	↓ 脱穀・調整		↑ イチバンザク			・メカイ節供 (8日) ・星まつり ・大師講	・星まつり ・餅搗き

(『さきたま民俗暦』1977年：筆者稿から加筆転載)